

『植民地朝鮮の予言と民衆宗教』

朴海仙* 著、法藏館、2024 年

金 泰勲[†]

本書はとても面白い。

ここで言う「面白さ」とは、単に扱っている素材『鄭鑑録』という予言書が、日本の学界では珍しいとか、叙述が刺激的だとかの意味ではない。本書の面白さは、すでに青野正明（『植民地朝鮮の民族宗教：国家神道体制下の「類似宗教」論』）、佐々充昭（『朝鮮近代における大倭教の創設：檀君教の再興と羅喆の生涯』）という二人の大きな先行研究者によって、それぞれ金剛大道、大倭教という重要な対象が深く掘り下げられてきたにもかかわらず、あえてその近傍に身を置き、しかもそこからなお別の風景を切り開こうとしている、その大胆さにある。

周知のように、青野は植民地朝鮮における「民族宗教」を、帝国神道体制下の「類似宗教」論との関係の中で捉え返し、民族主義・帝国・宗教統治の複雑な交差点に位置づけた。そこでは、終末思想は「予言の地」としての金剛大道において具体的な形を取りながらも、最終的には「民族宗教」論という大きな理論枠組みへと回収されていた。評者自身も以前、その方法の到達点を、帝国史的視野の中で朝鮮の「民族宗教」概念を相対化しうる地点に見ていた。

また佐々の大倭教研究は、羅喆という人物の「ありのまま」の事実関係を緻密に積み上げながら、その背後に檀君民族主義形成の緊張を浮上させる仕事であった。そこでは著者の言葉の節度、あえて言い切らない記述の仕方、そして読者に問いを返すような「余白」が重要な意味を持っていた。評者は以前、そのような書き方を、著者自身の眼差しを叙述の奥に潜伏させる方法として読んだ。

朴海仙の本書は、まさにその二人の大家による仕事の後に現れた。だからこそ本書は、同じ時代、同じく植民地朝鮮の宗教世界を扱いながらも、何を引き受け、何をずらそうとしているのか、という点から読まれるべきだろう。評者には、本書の独自性は何よりもまず、そのタイトルにすでに示されているように、「民族宗教」よりもむしろ「民衆宗教」という語を正面に掲げたところにあるように思われる。

この差異は、単なる用語上の選択ではない。青野が、植民地期朝鮮では変革主体としての「民衆宗教」という用語は適当ではなく、むしろ民族アイデンティティの拠り処としての「民族宗教」が妥当だとしたことはよく知られている。評者もその概念操作の意味を高く評価してきた。だが朴の本書は、あえてその地点からもう一度「民衆」の側へと降りていく。序章で著者自身が、本書の目的を「植民

* 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員

† 四国学院大学現代教養学部 教授

hooniyouni@yahoo.co.jp

地朝鮮で活動を展開した民衆宗教の姿をより立体的かつ動態的に把握」することに置いているように（9 頁）、本書は民族という大きな表象の側からではなく、予言に耳を澄ませ、それを読み替え、利用し、時にすぎり、時に生き延びるための道具として使いこなした民衆の感覚、その揺らぎ、その多様さを執拗に追おうとしているのである。

本書の読後感をひとことで言うなら、民衆たちは「予言を信じた」というより、むしろそれぞれの仕方で予言を使ったのだ、ということになるだろう。そしてその「使い方」は一つではない。ある者にとって予言は終末の不安を秩序化する言葉であり、ある者にとっては現実を別様に耐えるための想像力であり、また別の者にとっては共同体を束ねる教団的实践の根拠ともなった。第 2 章冒頭で著者は、「朝鮮の伝統的な予言思想が重要な役割を果たしていた」と端的に述べているが（62 頁）、評者はこの一文を、本書全体を貫く通奏低音として読んだ。本書の魅力は、その多様さを、平板な類型化によって整理しきるのではなく、強い筆致で一挙に読者の眼前へ差し出すところにある。評者にはそれが、たっぷりと絵具を含ませた筆で、暗い画面に一気に太い線を引くような仕事に見えた。細部はなお描き込まれていないかもしれない。だが、その一撃によってしか見えてこない時代の断面が、確かにそこにはある。

この点において、本書は佐々の仕事ともまた異なる。佐々の本が、叙述の節度と余白の配置によって、読者に思考を深めさせる書物であったとすれば、朴の本は、民衆の宗教的感覚が生きていた現場へ読者を押し戻すような力を持つ。言い換えれば、佐々の仕事が人物と思想の形成史における緊張の配列を読ませるものであったのに対し、朴の本は、思想が民衆の生活感覚においてどのように息をしていたのか、そのざわめきの方へと読者を導く。ここには、近代朝鮮宗教史をめぐる方法上の微妙だが重要な差があるだろう。

もっとも、本書が成功しているのは、そのような鮮やかな把握の力においてであって、すべての点で均質な完成度を持っているということではない。むしろ本書は、その面白さゆえに、いくつかの物足りなさをも同時に強く感じさせる書物である。

とりわけ評者が気になったのは、普天教を扱う部分である。本書は 1920 年代前半における普天教の運動を追い、さらに解散へと至る 1936 年の局面を示している。しかし、その間に横たわる約十年の時間については、少なくとも評者の読んだ限り、十分な言及が見られない。この空白は偶然なのだろうか。史料的制約によるものなのだろうか。もちろん、史料の残存状況が不均等であることは歴史研究において珍しいことではない。だが本書では、その空白が空白としてほとんど説明されていないため、読者はかえってそこに引き留められる。1920 年代前半の活力と 1936 年の解散とを結ぶ中間過程、すなわち運動の変質、組織の再編、信者層の変動、植民地権力との距離の取り方の変化などが、どのように進んだのか。この部分にもう少しでも光が当てられていれば、本書の普天教論はさらに厚みを増したに違いない。

ここで思い起こされるのは、評者が佐々の大倥教研究を読んだ際に感じた「余白」の問題である。あの書物では、言い残された部分が明確に次の問いを喚起し、しかもその留保自体が著者の構想の一部として機能していた。これに対して本書の普天教論における十年の空白は、問いを誘発するというより、やや唐突な断絶として現れる印象を与える。もちろん、その断絶そのものが植民地期宗教運動の歴史的実態を反映している可能性もある。だが、そうであればなおさら、その断絶の意味を著者自身の言葉でもう一步示してほしかったように思う。

金剛大道を扱う箇所についても、評者は同様の感想を持った。すなわち、本書は金剛大道を本格的

に論じようとしているが、その叙述は、どうしても青野の労作と比較されざるをえない。もちろん、同じ対象を扱ったからといって、後発の研究が先行研究の全体を乗り越える必要はない。むしろ別の視角から切り込むべきである。本書も実際、予言と民衆感覚という軸から金剛大道を捉え直そうとしている点で独自である。にもかかわらず、史料の読み込みの厚さや事実関係の積み上げという点では、なお補うべきところが残されているように見える。青野の仕事が、金剛大道を「予言の地」として位置づけるだけでなく、それを支えた統治・宗教行政・民族宗教論の全体構造まで視野に収めていたことを思えば、本書の金剛大道論は、その分だけ身軽であり、同時にやや脆くもある。

だが、ここで注意しなければならないのは、この「脆さ」は、そのまま本書の弱点としてのみ数えられるべきではない、ということである。なぜなら本書は、青野のように概念史・統治史の高い足場から全体を見渡すことよりも、むしろ民衆が予言に触れたときの震え、その感覚の細かな差異を掬い上げることに重点を置いているからだ。言い換えれば、本書は、理論的に整備された「民族宗教」論を再構築することよりも、予言が民衆のあいだでどのような生の働きを持ったのか、その局所性と可塑性を描こうとしている。だからこそ、青野と同じものを求めて本書を読むならば、たしかに不足は多い。しかし、青野が理論化の側から照らしたところを、朴は感覚史・民衆思想史の側から照らしているのだとすれば、その差異はむしろ積極的に読まれるべきだろう。

評者が本書を読んで最も惹かれたのは、この「民衆はそれぞれの仕方で予言を利用し、それぞれの仕方で時代を生き抜こうとした」という感触である。そこには、一つの民族、一つの宗教、一つの救済へと回収されない、無数の小さな身振りがある。予言は教義の中に閉じ込められてはいない。政治運動のスローガンにも還元されていない。むしろそれは、苦しい時代をどう渡るのか分からない人々が、その都度手探りでつかみ直す言葉であった。本書が執拗に捉えようとしているのは、そのような言葉の手触りであり、教団史や制度史だけでは掬いきれない領域である。

思えば、植民地朝鮮の宗教をめぐる研究は、しばしば民族主義との関係において語られてきた。もちろん、それは不可欠である。だが、その枠組みが強くなればなるほど、そこで生きた民衆の不安、期待、迷い、混交した信仰感覚は見えにくくなる。本書の重要性は、そうした見えにくいものを、予言という入口から再び歴史の前面へ押し出したことにあるのではないか。予言とは何か、民衆宗教とは何か、という定義の問題に即答するより前に、予言に耳を傾けた人々は何を感じ、何を欲し、何を怖れたのか、その問いへと本書は読者を連れ戻す。そしてその意味で、本書は、青野や佐々の先行研究を踏襲するのではなく、それらが切り開いた地平の上に、もう一つ別の感受性の回路を付け加える仕事になっている。

一方、民衆宗教論の方へ本書を配置してみると、本書の持つ可能性はポストコロニアルな状況を視野に入れた議論へとさらに広がるであろう。永岡崇は、戦後の大本教における平和運動を、「読みの運動」と「協働表象」という概念を用いて分析し、戦後日本社会における「民衆」表象の形成過程を描き出した（『宗教文化は誰のものか：大本弾圧事件と戦後日本』）。こうした視角から本書第2章「規格化される予言」を読み直してみると、そこには別の可能性も見えてくるように思われる。すなわち、予言をめぐる植民地当局や植民地期の学者たちが与えた解釈枠組み、そしてその影響の下で民衆が予言に接近していく過程は、一種の「読みの運動」として理解することができるのではないだろうか。また、その過程で形成された予言理解の共有／非共有された枠組みは、民衆と権力、知識人のあいだで生成された「協働表象」として捉え直すことも可能であるように思われる。永岡が「宗教文化は誰のものか」を穿鑿するも、「戦後は誰のものか」という問題にまでは議論を広げきれなかった点を考

えるならば、朴が描き出した予言の「規格化」は、植民地期に形成された宗教的言語の枠組みがポストコロニアルな状況を規定する起点として読み直される可能性を示している。そして永岡の試みと照らし合わせて本書を読み直す意義もまた、そこに見出されるのではないだろうか。

本書は完成された総合ではない。普天教論には時間的空白があり、金剛大道論にはなお補強の余地がある。だが、それにもかかわらず、いやむしろそうであるからこそ、まるで何かを予言しているかのように、本書は読者に強く残る。整いすぎた研究書ではなく、なお描き足されるべき余地を残しながら、しかし一つの鮮烈な断面を示してみせた書物として。本書が見せたその断面は、植民地朝鮮の民衆たちが、決して一枚岩ではない仕方で予言を生き、宗教を生き、時代を耐え抜いていたことを教えてくれる。その多様さを、ひとつの太い筆致でこちらに突きつけてくるところに、本書のもっとも魅力的な、そしていかにも淡々とした朴海仙らしい仕事があるのではないだろうか。

参考文献

青野正明（2018）『植民地朝鮮の民族宗教：国家神道体制下の「類似宗教」論』法藏館。

佐々充昭（2021）『朝鮮近代における大倭教の創設：檀君教の再興と羅喆の生涯』明石書店。

永岡崇（2020）『宗教文化は誰のものか：大本弾圧事件と戦後日本』名古屋大学出版会。

金泰勲（2023）「書評 佐々充昭著『朝鮮近代における大倭教の創設：檀君教の再興と羅喆の生涯』」『立命館アジア・日本研究学術年報』第4号。

金泰勲（2020）「書評 青野正明著『植民地朝鮮の民族宗教—国家神道体制下の「類似宗教」論』」『日本思想史研究会会報』36号。